



イタリアの名門 CARACENI (カラチェニ)

ローマ本店を独占取材

トミー&ジュリオ カラチェニ(ローマ本店、ボンコンパーニ通り)を独占取材した。1895年、ドメニコ・カラチェニがローマで仕立て職人としてスタートし、その卓越した技術、感性、洋服に対する取り組みが評価され、イタリアを代表するサルトリアの地位を築いた。彼の仕立ては伝統となり、2代目、3代目と受け継がれている。ミラノ、ナポリ、パリに店を出し、世界の貴族、財界人、芸術家、映画俳優など著名人をとりこにしている。顧客の平均年齢は60代、全体の約3割が海外。日本人もいるが、数ではないと言う。さらに、日本人はナポリ風を好みがちだが、カラチェニのクラシックなスタイルにも注目してほしいと付け加える。なお、取材は2013年10月、本店



にて職人のマリオ氏、親戚にあたるアンドレア・カラチェニ氏が協力してくれた。(取材=JUNKO)



カラチェニの歴史

1900年代のはじめ、ドメニコ・カラチェニ(1880-1940)は、15歳のとき、多くのアブルッツォの仕立て職人と同じように、ローマへ移り住んだ。すでに、裁断から縫製までを身につけていた彼は、数年のうちに名店の裁断士にまで出世し、成功をおさめた。(アブルッツォ=グラン・サッソ・ディタリア=イタリアの大岩、の山脈を中心として2,500mを越す高峰が並ぶ)

ドメニコの独立は、戦争によって多大な影響を受けることになったが、1926年には、ローマのボンコンパーニ通り21に本店を構えた。その後、評判が高まり、ナポリ、ミラノ、パリに支店を出した。最盛期に顧客として名を連ねたのは、世界的に有名な貴族、財界や芸術、映画などに関わる著名人だった。

ドメニコは、兄弟のアウグスト、ガリヤーノを呼び寄せ、アウグストはパリ、ガリヤーノはナポリの店を受け持った。しかしながら、またしても戦争の影響を受け、アウグストは帰国し、ナポリのガリヤーノもローマに戻った。

戦後、アウグストはミラノへ移り、現在のA・カラ



ECCELLENZA

(卓越)

DI LUSO

(豪華・贅沢のきわみ)

チェニへと続いている。ガリヤーノの息子たち、トミーとジュリオの名を冠した仕立屋が、現在の「ローマのカラチェニ」である。

ガリヤーノは、息子たちに、アカデミアでの裁断の授業、ポルテス・ポール裁断助手、ジェノヴァのエヴァンジェリスタでの実習。さらにロンドンでは1年間、ヘンリー・ブール、キルガー、フレンチ&スタンバリー、ジョン・デーヴィスなどで研修をさせた。このようにして、トミーとジュリオはドメニコの確立したスタイルを革新しながら、伝統を継承している。

現在でも、伝統技術への思いと、芸術的な精神により、カラチェニの服は他にはない、独自の優美なラインを追求している。それは、新しい次の世代に受け継がれている。



職人

わずか3年の辛抱ができない若者

現在、ローマの工房内で働く職人は15人、平均年齢は60歳を超える。いちばん若い職人でも40歳代半ばである。そのほかに、ズボン専門の職人が外注で何人かいる。「若い職人が育たないということは、深刻な問題ではある」と語っている。

職人として賃金を得るには、最低でも3年間の修行が必要だとしており、そのわずか3年を続ける辛抱のない若者がほとんどなのだ。職場での取材に応じてくれたのは、職人のマリオ氏。8歳の時から故郷の仕立て屋に入入りし始め、カラチェニの職人として働くようになって50年の大ベテランである。

顧客について

若い層の顧客も少なくはないが、平均すると60代が大多数を占める。海外の顧客も多く、全体の3割ほどになる。都市としては、パリ・ロンドン・アメリカ各地など。日本人の顧客もいるが、数ではない。日

本人は、ナポリ風を好みがちで、クラシックなスタイルの服の良さを知らないのではないと思われる。

日本人はブランドを嗜好するという印象も受ける。大多数の他人が良いというものをよいと思い込む傾向があるのではないか。「どうか、ローマにカラチェニの服を見に来て、その仕事がどういうものであるかを、直に感じてもらいたい」と語る。

生地について

生地はイタリア・イギリス製のものが多い。ペル一製のビキューナなども多く扱っている。ブランドとしてはゼニア、ロロピアーナ、スキャバルなど。

洋服づくり

顧客の採寸をして、生地を選んでということのほかに、それぞれの顧客が、洋服を通じて体現したい個性を引き出すようなラインを見つける目が、仕立て職人にとって最も重要なことである。顧客の個性を表現した服でありながら、カラチェニの個性、特色が見て取れるような服でなければならない。

採寸が済み、生地が選ばれると、まず、生地が水で



CARACENI のクラシック ダブルのスーツ



CARACENI のクラシック 3つボタン

海外トピックス

濡らされ、乾かされ、アイロンがかけられる。熟練した裁断士の手により裁断され(写真右)、職人の手に渡され、最初の仮縫いの準備がされる。

最初の仮縫いは、生地と芯地と仕付け糸だけからなる、シンプルな形で用意され、それが顧客の体形に合っていて、大きな欠点がないかを確認するために行われる。2回目の仮縫いのために、最初の仮縫いは解かれ、再び形が作られる。手縫いを中心に、その作業は行われ、古いが年期の入った、現役の足踏みミシンや、今では作られていない重い鋳鉄のアイロンで、丹念に時間をかけ、顧客の腰、肩、腕、首の動きに沿った形が作られていく。

立体に形作られた2回目の仮縫いの後、仕付けは再び解かれ、細かい修正を行う。その修正を施した身頃から、次回の裁断に使うための型紙を残しておくことになる。上着だけでも30時間以上におよぶ作業を経て、最後に手縫いのボタンホールをかがり、仕上げのアイロンがけを経て、顧客のための1着ができあがる。こうして、カラチェニの特色ある、伝統による服が完成する。

単純ではないが、よりカラチェニらしいスタイルを挙げるならば、クラシックな3ボタンか、ダブルの



(生地はゼニア、ロロ・ピアーナ、スキャバルなど)
スーツだろう。(3ページに写真)

※ここに掲載している写真はANDREA CARA CENI氏が厳選、提供。無断転載厳禁。

卓越・豪華・贅沢のきわみを追求すること

洋服づくりとは『すべて手作りの洋服というのは、技術と、その習熟によって、生地を平面から、他に存在しない形へと変えてゆくということ。それは、そこに携わる我々にとっても、とても魅力的なことである。とにかく、止むことなく、継続する、「続ける」と

いうこと。使い捨て、と呼ばれる時代の中にありながらも、長く愛着を持って着てもらえる洋服。その中に生き続ける「ECCE LLENZA=卓越」、「DILUSSO=豪華・贅沢のきわみ」を追求することにある』。

Y-camicie

～イタリアの高級シャツ素材を提供する「ユミ カミーチェ」～

ユミカミーチェ
取り扱いブランド

■ canclini (カンクリーニ)

■ Thomas Mason (トーマスメイソン)

■ Monti (モンティ)

■ Ferno (フェルノ)

■ Oltina (オルトリーナ)

■ Antex (アンテックス)

※シャツ生地着分

(スイスのアルモを入荷)

カット売り専門卸

<http://www.y-camicie.com/>

TEL0463-72-7176